

## 国語科総合単元づくりのための 教材開発と指導法に関する基礎的研究 (IV)

—言葉をとおしてかかわり合い、他者とつながる言葉をつくり出す国語科の学習—

山元 隆春 佐々木 勇 杉川 千草 加藤 秀雄  
八澤 聡 藤田 敬子

### 1. はじめに

私たちは、小中一貫教育における国語科の総合単元の開発を目標に、これまでカリキュラムや教材づくり、指導法の改善などに取り組んできた。昨年度は、小中の発達段階に照らしながら「他者」を学習場面に効果的に設定することによって、他者を取り入れた授業が学習者の読みにどのような影響を及ぼすかを明らかにする実践・研究を行った。小6では、他者を、教室の中に実在する目に見える存在として設定し直接的な交流による授業を行い、中3では、架空の存在としての他者をイメージし自己内対話を中心とした授業を行った。その結果、小6では、他者に影響されることによって自分の読みが自覚化されていたが、中3では、曖昧で慎重で内省的な読みになっていたことから、小中の発達段階による「他者」のあらわれ方・意識化の一つの特徴として指摘できることがわかった。

本年度は、それぞれの発達段階における子どもたちが、授業の中で、言葉を通して、どんな他者とどのようなかかわり合いをしているかを明らかにし、その上で、子どもたちが学習の中で、他者につながる言葉をつくり出していけるような指導法や単元を開発するための手がかりを見出したいと考えた。それは、学習者が言葉をとおしてかかわり合う場面とはどのような場なのかを想定し、どのような内面の変化によって他者とつながろうとするのか、そして、どのような過程を経て他者とつながろうとする言葉がつくり出されていくのかといった、言葉を通じたかかわり合いやつながりのある学習場面の特徴の一端を明らかにすることである。私たちは、学習者が他者とかかわり合いながら他者とつながる言葉をつくり出していく学習をする授業のモデルをいくつか仮定し、実践をとおしてその可能性と問題点を明らかにしていくことにした。

### 2. 研究の構想

#### (1) 研究の目的

本研究の目的は、小中の発達段階に照らしながら「他者」を学習場面に効果的に設定し、他者とのかかわり合いの中から学習者が自分の言葉を豊かにしていく学習活動・単元を開発するための基礎的な知見を得ることにある。国語科では「他者」という用語は多様な意味を含んだ言葉として用いられるが、ここでは自己認識に対応する言葉としての面に着目し、学習者が自己に気づき、主体的な言語認識者へと変容していくために、異なる立場から自己を強く意識させる存在としてとらえることとする。私たちが言葉をとおして新しい考えに気づかされる時、そこでは単に新しい知識の発見と蓄積だけが行われているわけではない。新しい知識の発見は、同時にこれまでの自分の知識や考え方の問題や誤りを再確認し修正することを促す。その過程で、私たちは自分の存在（とりわけ未熟な自己）を強く意識することになる。その際、自己認識を補強するのが他者の存在である。

#### (2) 研究の方法

##### ①「他者」の設定

本研究では、各学年の学習において他者をそれぞれ次のように設定し、単元を構成した。

小4：情報を得る手段としてのメディア、直接交流の体験をした相手、発信する相手

小6：情報の発信者、同じ体験を共にした同級生、発信する相手

中1：言葉をおくことを前提として自分が想定した身近な人物、作品を共有し合った同級生

小4の場合は、他者を、実際の交流し記憶の中にも明確にある存在を他者として置づけ、他者との直接的

な交流による授業を想定する。小6では体験の記憶の中にいる同級生や友人、また自分自身を意識すると共に、クラスメイトとの直接的な交流による授業を設定した。また、中1では、実在というよりも実在はするが自分の内面でイメージ化した存在としての他者を設定し、主に自己内対話を中心とした授業を想定している。

実際の授業の中で、対象化された他者が学習者のつくり出す言葉にどのような影響を及ぼすかを明らかにしていくこととする。

いずれの学年の単元でも、取り扱う教材の中に、言葉による話し合い活動や表現活動を設定し、言葉によるかわり合いや、言葉をつくり出す学習過程が自然に行われるよう配慮した。

## ②指導の工夫

想定した「他者」の違いが学習指導の中で顕著に表れるように、次のような工夫を試みることにした。

小4、小6では、教科書教材のほかに多様な資料を活用する、意見交流の場を積極的に設ける、新聞を書く、などである。いずれも、実在する具体的な他者を学習に取り入れようとした。

中1では、教科書教材の他、主要には自分の中でつくり上げられた他者に気づかせる学習を試みた。自己内の他者を積極的にイメージさせ、自己内での対話を積極的に取り入れるようにした。

## (3) 検証の方法

検証の材料として用いるのは、次の二つである。

ア. 学習記録（ノート、ワークシートなど）

イ. 授業記録（学習者の発話記録）

ウ. 作品（詩、作文、新聞、ポスターなど）

この三つを総合判断して、検証と考察を行う。

## 3. 実践1—小4「くらしを見つめて」—

### (1) 授業の構想

#### ①単元について

本単元で扱う説明文「手で食べる、はしで食べる」は、「食」にかかわる文化を中心に世界の文化を知り、日本の文化を見つめ直す機会を与えてくれる。説明文の読み取りから、日本で暮らす自分と世界にいる他者を意識し、また、文化に関する調べ学習を通して、それぞれの文化にある違いや共通点に目を向け、より自分の立場を明確にしながらかしを尊重したコミュニケーションについて考えることをねらいとしている。

指導にあたっては、外国の文化を身近な形で知ることができるようにし、相手意識を持ちながら外国の文化に関する調べ学習を進め、伝える手段を選びながら、

調べたことを題材に情報発信を行うことを意識させるようにした。情報の受け手である相手を想定し、聞く側への配慮を意識しながら自分の主張を明確に述べる力を育成し、相手に合わせて伝達していくことの大切さに気づかせていきたいと考えた。

#### ②単元目標

○自国の文化や外国の生活の文化に興味を持ち、進んで調べたり話し合ったりすることができるようにする。

○調べた内容や自分の考えを、筋道を立てて話したり、相手の話の要点をつかみながら聞いたりすることができるようにする。

○伝えたいことを意識しながら、ポスターや原稿を書くことができるようにする。

○要点を押さえながら、伝えたいことをとらえることができるようにする。

○グループで、協力して学習を進めたり、外国の文化への理解を深め、お互いを認め合ったりすることができるようにする。

#### ③単元計画（全18時間）

第1次 「手で食べる、はしで食べる」を読もう

.....10時間

第2次 文化のちがいを調べて発表しよう

.....8時間

※第1次と第2次の学習の間に外国からの留学生との交流学習を行っている。

## (2) 授業の実際

〈第1次 「手で食べる、はしで食べる」を読もう〉

単元の導入では、教材文の読み取りにはいる前に、題名のみを紹介し、手で食べること、はしで食べることのちがいやイメージについて話し合った。

当初、子どもたちは、手で何かを食べることについて日常的であるかのように話をしていた。しかし、話し合う中で、手で食べる場面が限られていることに気がついたのである。子どもたちが手で食べる場面としてあげたものは、「おかしを食べるとき」、「果物を食べるとき」、「肉まんやその他のおまんじゅうなどを食べるとき」、「おにぎりを食べる時」、そして教科書で紹介されているように「お寿司を食べるとき」などであった。日に三度の食事の中では、ほぼ、はしまたは、フォークやスプーンなどを用いて食事を取ることであった。このときに質問したところでは、約3分の1の子どもたちが週に3～4日は、スプーンとフォークを使って食事を取るとのことで、はしを使わないで食事を取ること増えているのだという話題も出ていた。

教材文を読んだ後、初読の感想を書いた。子どもたちは、主に手で食べる人たちがいることや、食事のマナーが国によってまるで違うことなどに驚きを感じていた。

#### 《子どもたちの感想の一部》

- 日本ではマナーが悪いことが、インドでは当たり前だということなどのちがいについて考えることが、今までなかった。
- はしで食べるのが当たり前だと思っていたけれど、インドの人たちにとっては手で食べる方が当たり前なんだと知ってびっくりした。
- それぞれの国で食べ方が違うんだということを知った。わたしはおわんを持って食べるけれど、韓国ではぎょうぎが悪いことだということを知った。

説明文前半の読み取りでは、米の形や性質の違い、インドの人たちの食事に対する考え方の違いなどから、手で食べるかはしなどのような道具を使って食べるかの違いが生じたということを読み取っていった。子どもたちは、インドの人たちの「食べ物にさわった時の感覚もいっしょに楽しんでいる」という記述について注目し、「なるほど、はしを使っていてはさわった感覚は味わえないな」などと納得している姿もみられた。

説明文の後半は、主にはしを使って食べる国々が紹介されており、ここでは、同じようにはしを使って食べる国でも、国によってはしの使い方や形が違うということが紹介されている。韓国で器を持って食べることは行儀が悪いとされていることについて読んでいったときには、「まるで日本と真反対だ。」などという感想も出ていた。また、中国やベトナムの食事風景とはしの長さの関係のこと、モンゴルのはしとナイフのセットなども子どもたちの興味をひいていた。

いずれにしても私たちがごく当たり前のこととしてとらえていることと比較しながら考えていくことができ、子どもたちにとっても新たな知識を得ることにもつながった。

最後に、筆者の思いを読み取り、考えたことをもとにまとめた感想を書いた。

#### 《子どもたちの感想から》

- ・同じはしを使う国でもちがうところがあるなんてびっくりした。
- ・日本は日本らしく、モンゴルはモンゴルらしく、自分の国のいいところを生かすのが文化なのだと思えて感じた。
- ・ご飯を手で食べるのにはちゃんと理由があって、米の「性質」もちがうのだということがわかった。

- ・わたしは他のいろいろな国でもはしが使われていると思っていたけれど、それぞれの国でちがった食べ方をしているのだということもわかった。
- ・インドの米はねばり気が少ないらしいけれど、おいしいのかな。一度、食べてみたい。
- ・中国やベトナムと同じはしでも、長いはしを使っているだなんてはじめはびっくりした。けれど、文化のちがいから考えてみると、中国で日本のことを教えてたら、中国の人はびっくりするだろうと思う。
- ・中国やベトナムとちがって、日本だけめいめいのはしを持っている。
- ・国によって、食べ方や用具の使い方がちがう、それぞれに理由があるのだなと思った。

説明文から多くのことを学んだ子どもたちであった。自分たちが当たり前のように感じていたことが、世界の中では全く当たり前のことではなく、多くのものの中の一つにしか過ぎないことを改めて感じる学習の場にもなっていた。

#### 〈交流学习の様子から〉

国語科の学習と並行して、留学生との交流学习を行った。当日参加してくださった留学生の方々は、気さくに接してくださり、子どもたちもすぐにうち解けることができた。

この日の学習の中では、ゲームや会話の中で親睦を深めるとともに、留学生の方から出身国のことを紹介していただいた。パワーポイントを使って写真を見せてくださり、子どもたちも驚きを持ってお話を聞いていた。スリランカの国旗の意味なども話をしていたところ、先だって行われた音楽鑑賞会の折に、タンザニアの国旗の意味を紹介していただいたことを思い出している子どももいた。

説明文の読み取りが終わった後、第2回目の交流学习を行った。今回は、留学生の方々に実際にどうやっ

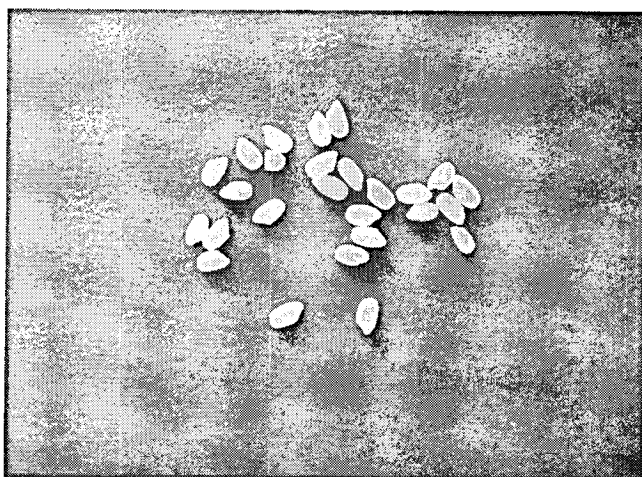


写真1 日本のお米

でご飯を食べるのか教えていただいたほか、説明文にも紹介されている2種類のお米（日本のお米と細長いバスマティという種類のお米）を実際に炊き比べ、食べ比べる活動に取り組んだ。

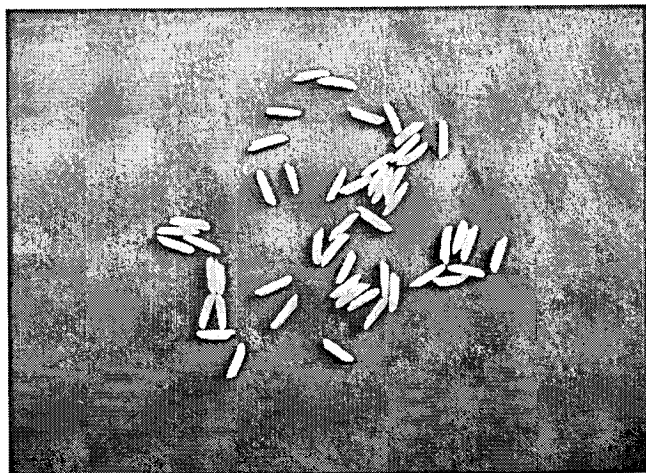


写真2 バスマティという種類のお米

交流学習の中で、実際に体験活動を交えながら日本と外国の食事の仕方のちがいについて話していただいた。お米についての話をしてくださる方もあり、説明文に書かれていることの意味を深めるとともに、新たな知識を得ることもできた。



写真3 交流学習の様子

〈第2次 文化のちがいを調べて発表しよう〉

教材文の読み取りの後、交流学習で出会った留学生の方々のことを思い浮かべたり、教えていただいたことなどを思い出したりしながら、外国の文化についての調べ学習に取り組んだ。

自分が調べたい国ごとに小グループを作り、グループで協力しながら学習を進めていくようにした。司書の先生にも協力していただき、調べ学習のための資料となる本を集めておいた。子どもたちは国の正式な名前や人口、国旗などの基礎的なデータを集め、テーマ

を設定して調べ学習を行った。

実際に交流していただいた方に向けて発信することを意識しながら調べ学習に取り組み、調べた内容をまとめていった。実際の体験を思い出し、楽しかったことや、実際に学んだ内容を想起しながら取り組んでいく姿が見られるとともに、自分たちの学びに協力してくださったことへの感謝の気持ちを伝えようとする子どもも出てきた。自分たちなりに調べた内容について、相手のことを考えながら整理し、発表・発信に向けての練習に取り組んだ。

発表に関しては、自分たちの発表を、伝える相手を明確に意識しながら、お互いに意図を持って伝え合い聞き合う活動に主眼を置いている。良き話し手とともに良き聞き手を育成したいと考えた。



写真4 発表内容についての話し合い

お互いのリハーサルを見合っ出てきた考えをもとに、発表内容を修正した。今後は、実際に来ていただいた留学生の方々に学習の成果を伝えるための発表会やビデオレターの撮影に取り組む予定である。

#### 4. 実践2—小6「メディアを学ぶ」—

##### (1) 授業の構想

###### ①単元について

本単元は、新聞記事やニュース番組を素材にして、メディア・リテラシーを育てようとする単元である。子どもたちは、日常的にテレビやインターネット、携帯電話などを通してさまざまな情報に接しており、それらの内容を十分に吟味しないままに受け取ってしまう状況である。ここでは、受信者と発信者の両方の立場を体験させ、情報の向こうにいる発信者の思いを感じさせることにより、身の回りのさまざまな情報を正しく効果的に読み解き、自らの情報発信に生かしていく力を育てることをねらいとしている。

指導にあたっては、同じ出来事を扱った新聞記事や

ニュース番組を比べさせ、発信者の意図によってさまざまな表現方法や受け止め方があり、身の回りの情報が加工されたものであることに気づかせる。そして、新聞記事やニュース番組の比較で学んだことを生かして、学校行事についての新聞記事をつくらせる。その際、お互いの新聞記事を交流することによって、それぞれの表現方法や表現内容の工夫を見つけるとともに、自分の意図が伝わるように言葉を吟味させる。また、できあがった新聞記事を発信し、お互いの思いを共有させることを通して、新たな他者とのつながりをつくり出していきたいと考えた。

## ② 単元目標

○相手の意図を考えながら情報を受け取り、自分自身の考えで情報を判断することの大切さをとらえることができるようにする。

○新聞記事やニュース番組を調べ、それぞれの特徴を比較しながら読み解くことができるようにする。

○グループでお互いの新聞記事を交流し合うとともに、学んだことを自分の新聞記事づくりに生かすことができるようにする。

## ③ 単元計画（全8時間）

第1次 新聞記事を読み解こう……………2時間

第2次 ニュース番組を読み解こう……………1時間

第3次 新聞記事とニュース番組を比べよう……………1時間

第4次 新聞記事にして伝えよう……………4時間

## （2）授業の実際（A児の授業記録を中心に）

### 〈第1次 新聞記事を読み解こう〉

まず、夏の甲子園決勝戦広陵対佐賀北の試合のビデオを見せ、知っていることや感じたことなどを交流させた。その後、決勝戦の試合結果を報じる平成19年8月22日付の朝日新聞広島版の号外と朝日新聞佐賀版の号外を比べさせ、気付いたことを挙げさせた。

・佐賀版は「佐賀北優勝おめでとう」という気持ちが伝わってくる。

・広島版は、広陵サイドから号外が作られている。

・「準優勝残念だったね」という気持ちが伝わってくる。

・写真も、佐賀版は決勝満塁本塁打だけれど、広島版は広陵がヒットを打っているところを載せている。

次の時間、翌日の広島版と佐賀版の朝刊の1面と第1・第2社会面を提示し、それぞれの伝えたいことや表現方法の違いを各自で見つけ交流させた。

・佐賀版は佐賀北の記事がたくさん書いてある。

・佐賀版は見出しに方言を取り入れて、共感を持っている。

・広島版では、1面や第1社会面には佐賀北のことが書いてあるけれど、第2社会面には広陵のことが書いてある。

・敗れた広陵を励ましていることが感じられる。

この二つの新聞を読んで、読み手が読みたくなるように、佐賀なら佐賀北、広島なら広陵というふうに取り上げているのも違うし、佐賀北の優勝についての表し方も違うなと思いました。ほくも新聞を書くときには、こういうことに気をつけたいです。

### 〈第2次 ニュース番組を読み解こう〉

第1次の新聞記事の読み比べに続いて、第2次では決勝戦当日の「ニュースウォッチ9」（NHK）と「報道ステーション」（テレビ朝日）の映像を見比べさせた。そして、同じ出来事の報道ではあるが、伝えたいことに合わせてどんな工夫がなされているか、それぞれのニュース番組の構成を分析させた。

・初めに試合結果を言わずに視聴者に興味を持たせている。

・NHKは佐賀北の話題が中心。

・報道ステーションでは、決勝戦までの試合の様子、試合前や試合後の地元の様子、応援席の様子、インタビューなど、いろいろな角度から伝えている。

・「がばい旋風 VS 古豪」というネーミングで印象づけている。

・キャスターの会話や音楽で盛り上げている。

ニュースでもだれに見せるかによって伝えたい方が違って、NHKとテレビ朝日では時間が違うし内容も少し違うなと思いました。NHKは問題のストライクかボールかの判定が審判側から、テレビ朝日はピッチャー側からと違いました。

### 〈第3次 新聞記事とニュース番組を比べよう〉

新聞記事とニュース番組について読み解いてきたことをふり返り、それぞれの特徴について整理させた。

・新聞記事は、いつでも好きなときに読める。

・自分の力で読むことができる。

・ニュース番組では、表情や声の調子で感情も伝えられる。

・映像があるのでわかりやすい。

・情報を速く伝えることができる。

その後、新聞記事もニュース番組も発信者の意図によって情報が加工されていることを確認し、情報の受信者としてどのようなことに気をつけなければならないか考えさせた。

新聞社やテレビ局によって違う内容なので、全てをうのみにしてはいけないうし、いろいろな情報の中から自分に必要な正確な情報を探さなくちゃなと思いました。全てが真実というわけではないので、こ

ういうことに気をつけていきたいです。

〈第4次 新聞記事にして伝えよう〉

これまでの情報の受信者としての学習を生かして、今度は発信者の立場から、6年生自身がさわやか班(縦割り班)の班長や副班長として活躍した自伸会(児童会)行事の「秋季大会」についての新聞記事を書かせることにした。

まず、秋季大会の様子をビデオで想起させた後、だれにどんなことを伝えたいかを決めさせた。そして、自分の伝えたいことに合わせて見出しを付ける、写真を2枚入れる、400字程度の文字数にするなどの大まかな条件を決めた。また、事前に本校の行事が掲載された実際の新聞記事を紹介し、見出しの付け方や本文の書き方など基本的なことを確認させた。

記事作りにあたっては、自分の伝えたいことに合わせて、当日の日記を読み返したり、班のメンバーや自伸会総務(役員)にインタビューしたりしている子どももいた。

下書きができあがった段階で、グループの中でお互いに自分の新聞記事を音読して交流させ、それぞれの表現方法や表現内容の工夫を見つけたりアドバイスをしたりさせるようにした。

〈A児の新聞記事へのアドバイス〉

- ・とてもよかった。(T児から)
- ・すごくいい文だと思いました。体言止めなどが使っていて工夫が目立ちました。(K児から)
- ・文の内容が少し違うと思う所もあったので、直したらいいと思います。でも、総務ががんばっていたということがすごく伝わってきたのでよかったと思う。(N児から)


子どもたちはこの交流を通して、全員が同じように体験した行事についての新聞記事であるのに、見出しの表現や本文の内容が、筆者の伝えたいことによって随分異なっていることに驚いていた。また、新聞記事は、本文と見出しと写真がつながり合って、効果的な表現になっていることに改めて気づいたようだった。

その後、自分の伝えたいことがしっかり伝わるように、新聞記事の内容や表現を吟味させ清書させた。(資料1) 子どもたちは、友達のアドバイスを受けて、見出しの表現を練り直したり、本文の内容を伝えたい相手に合わせて推敲したりしていた。


自分で読んでみると、客観的になれてどこを直せばいいかわかった。グループの人たちの記事の良いところを学べた。ほくたちのグループはみんなま

みんなできっかんが大成功

十一月十五日木曜日秋季大会がうまくいくよう  
 気は快晴。中学校のグラウンドに話し合った。成功して  
 ウンドに集まった全三十話し合、たかいかあ、た  
 ハ班のさわやか班の子供とうれしそうに語った。  
 達か秋季大会を行う。しかし、総務だけでは  
 秋季大会の内容は、紙なく、さわやか班のみ  
 ぼとり、絵画ゲーム、なもかんばった。この  
 オリジナルクイズなどの班も一生けん命に走った  
 個性的な種目が並んだ。りして、秋季大会を成功  
 これは総務の人たちや、させるために身を粉にし  
 案を出してくれた児童のてかんばったのだ。  
 人たちのおかげであろ。休みの日も学校に集ま  
 総務の人たちは、休みて話し合ったり当日は  
 だ、た金曜日も学校に集注意や説明をした総務の  
 ました。秋季大会につい人たちに写真と、班長  
 てを五人で話し合った。を中心にかんば、たさあ  
 う。そのやが班左上の写真のおか  
 のとき、の秋  
 務の会長  
 の金村カ  
 君は「秋



班長を中心にかんばるさわやか班



×体一生けん命に走る。校長の金村カ

資料1 A児の作った新聞記事

めがいいなと思いました。他の人と自分の考えも違  
うと思いました。

今後、全員の新聞記事が完成した段階で、自分の伝  
えたい相手に読んでいただくとともに、お互いに交流  
させ、それぞれの表現方法や表現内容のよさを共有さ  
せたいと考えている。

## 5. 実践3—中1「心と言葉～人を励ます言葉」—

### (1) 授業の構想

#### ① 単元について

近年はインターネットや携帯電話等の普及が目覚ま  
しく、非常に便利な世の中になっている。しかし、そ  
れによって失われたものも多い。特に、子どもたちの  
コミュニケーション能力の低下は年々厳しい状況にな  
ってきているのではないだろうか。ブログやメールに  
よって文字によるコミュニケーション（文化）が残っ  
たと言う人もいる。しかし、そこに書かれるものは、  
自分勝手な表現で言いたいことを書きつづるだけであ  
ったり、中傷記事中心であったりと文化と言い難いも  
のが多い。

そこで本単元として“心と言葉～人を励ます言葉～”  
を掲げた。言葉は、発する人がその言葉にどのような  
思いを込めるかにより、持つ意味が大きく変わって  
くる。どんなに美しい意味を持つ言葉でも、心が伴わ  
なければ意味がない。また、否定的な意味を持つ言葉  
でも、状況や場面に応じて相手のことを思いやっ  
て発せられた言葉なら、その言葉は温かみのある言  
言葉へと変化する。中学1年生という時期は、成長過  
程においても、人間関係で悩むことが多い時期であ  
る。その中で「言葉」を通じて人との温かい関係を  
築くということは大変重要である。そういう意味でも  
、この単元を道徳授業と関連させて行う意味は大  
きいのではないだろうか。

指導にあたっては、様々な形で肯定的な言葉と出  
会わせ、言葉の持つ温かさや美しさ、優しさについ  
て考えさせる。また、否定語も相手の立場に立っ  
ての言葉で、心がこもっていれば励まし  
の言葉にもなることに気づかせ、「言葉」と「心」  
の関係を理解し、温かい言葉をと  
おして他者とのつながりを築く一つのき  
かけとさせる。そして、多くの温かい言葉に  
触れることにより、生徒自身の語彙力も高  
めていきたいと考えた。

#### ② 単元目標

○語句の辞書的な意味と場面での意味との  
違いに注目し、言葉と人の心とのつな  
がりに気づくことができるようにする。

○伝えたい事柄や気持ちを適切な表現  
方法で書くこと

ができるようにする。

○自分の作品を他者と交流することにより、  
語彙を増やし、相手を温かく見つめる心  
が育まれるようにする。

#### ③ 単元計画（全15時間）

第1次 人を励ます言葉～詩『夕焼け』～…… 3時間

第2次 人の心をつかむキャッチコピー…… 3時間

第3次 へたうま文字で心を伝える…… 3時間

第4次 日本一短い〇〇への手紙…… 3時間

第5次 人を励ます言葉…… 3時間

### (2) 授業の実際

〈第1次 娘を励ます手紙を書こう〉

吉野弘『夕焼け』の詩の読解学習を終えた後に、詩  
の中の登場人物である「娘」を励ます手紙を書かせた。

電車の中の娘さんへ

はじめまして。私はあなたのことを詩の勉強をして  
知りました。最初はなぜ2回目までは席を譲った  
のに、3回目は譲らなかったのだろうと思ったけど、  
今はあなたの気持ちがよく分かります。誰だって譲  
れない時はあるし、自分を責めることはないと思う  
よ。私だったら1回も譲れなかったと思うけど、あ  
なたは2回も譲ったんだから。

私はあなたのことを知って、今度から席を譲って  
みようかなと思いました。だから、顔をあげて、美  
しい夕焼けを見てくださいね。

上記は生徒の書いた手紙である。ほとんどの生徒が  
娘の立場を考え、少しでも娘を励まそうと温かな言  
言葉を手紙の中で使っている。また自分の日常を振り返り、  
詩の世界を現実世界と重ね合わせていた。

〈第2次 キャッチコピーで人の心をつかもう〉

キャッチコピーの役割と効果について学習したあ  
と、新入生を勧誘するためのキャッチコピーを各部活  
で考えさせた。

「夢に向かって走れ！

無限の可能性が見えてくる！」

サッカー部

「輝く未来へと続く My track」

陸上部

「空が風がテニスが君のその想いを待っている」

女子テニス部

「己を信じ仲間を信じすべてを信じた時

勝利がある」

女子バスケットボール部

部ごとにそれぞれ工夫がなされ、おもしろい作品が  
できていた。

〈第3次 へたうま文字で人の心を耕そう〉

色々な人が書いた「へたうま文字」を紹介し、「心  
を耕す」ということについて考えた。生徒からは「心  
を耕すということは心を豊かにすること」「優しい気

持ちにすること」など様々な意見が出てきた。難しい発問かとも思ったが、生徒は「心を耕す」ということについて真剣に考え、積極的に意見を述べた。

その後、各自で一字を決めさせ、筆ペンを用いてへたうま文字を書かせた。作品完成後に全員の作品を見て評価させたが、友達の仕事に感動したり、真似てみたいと思ったりした生徒も多かった。またこの学習が気に入る、自分で色紙を購入して新たに作品作りをする生徒も数名見られた。

#### 〈第4次 短い手紙で心を伝えよう〉

この学習でも、色々な人が書いた「日本一短い家族への手紙」を紹介し、自分の作品作りにつなげた。

父さん トイレのあと 空気臭いんだよ！！

上記はある生徒の作品である。この生徒は普段なかなか素直になれない生徒であるが、この作品を書く前に次のような作品も書いていた。

父さん 叱ってくれて ありがとう

この生徒のように、普段は照れくさくて言えないことを言葉にして表現することで、「すっきりした」「何か嬉しかった」というような感想が生徒から出てきた。

#### 〈第5次 人の心と言葉について考えよう〉

ここでは、肯定語と否定語について考えた。否定語も用い方によっては人を励ます言葉になることを学習し、言葉は心を伴うことによって初めて意味を持つということを考えさせた。

下の写真（資料2）は学習の最後に生徒が書いた作品である。温かい想いを伝えたい相手を選び、その人に贈るための言葉を考えさせた。生徒は今までの学習



資料2 生徒の作品

を生かして、筆ペンでへたうま文字を書いたり、詩を書いたり、短い言葉で自分の思いを精一杯相手に伝えようと様々な工夫をして作品を仕上げた。

全員の作品を評価しあったあと、自分の作品を渡したい相手と同じクラスにいる生徒は、皆の前でその作品を友達に手渡した。そのときの生徒の様子は、照れくさそうにしながらも、もらう方も渡す方も非常に嬉しそうな表情であった。

### (3) 感想から

- 今まで私は正直言って「何が言葉の大切さよ」みたいな感じで捉えていたけど、今回の学習で色々な言葉に出会って、言葉の楽しさ・おもしろさが分かりました。この授業をして初めて国語が好きになった気がします。
- 心と言葉について楽しく学ぶことができました。学習を終えて思ったことは「夕焼け」の詩から今日の授業まで全部つながっているんだなあとということです。「心」という一文字でたくさんのつながりを発見できるなと思いました。
- どんな言葉でも心があると「+」で受け止められることが分かったし、今までの学習をとおして、人の心が言葉だけでこんなにも温められるものだということが分かった。でもそのぶん、一言で人を傷つけてしまうこともあるのだと感じました。
- 言葉と心…関係がなさそうに見えて、本当はすごく似たものなんだなと思った。言葉はすごいものだ改めて感じた。
- 「言葉」というのはいろんな力があるんだなと思いました。言葉は人の気持ちを変えたり、助けたり、支えてあげられるすごくすてきなものだと思います。「言葉」から色々な気持ちが分かったり、逆に色々な気持ちにされたり。だからこそ、誤解もされやすいんじゃないかな。だから「言葉」は上手に使わなければいけない。支えられたりもするけど、逆に傷つけてしまうから。これからは上手に「言葉」を使っていきたいです。でも本当に色々な「言葉」に出会って、いろんな気持ちにされて、すごく楽しかったし嬉しかった授業でした。
- 普段何気なく使っている「言葉」を文や単語として書いてみるだけで、内面的な事まで考えさせられて、自分自身の考えを改められる気がする。「言葉」こそ、人類最高の発明だと思う。
- 「夕焼け」から始まったこの学習を通して、今まで気にもしなかったことがとてもありがたいことだと気づけた。今までの当たり前がとても大切な奇跡だと思えた。



学習後の生徒の感想を読んでもと、今回の学習で改めて言葉について考えられた生徒が多いことが分かった。また、自分自身の言葉についても振り返ることができ、言葉が人と人とをつなぐ大切なものであることに気づくことができたのではないだろうか。

しかし、それがすぐに生徒の日常に結びつき、生徒の言語環境が劇的に変化するということはあり得ない。だが、その中でわずかでもこの学習が生徒の心に残り、今後の人生にプラスに働いてくれればと願っている。

## 6. 考 察

### (1) 他者の言葉と出会う単元構成

子どもたちは日々様々な他者と出会っている。国語の授業の中においても、同じ教室の中に見える形で存在する他の学習者や教師などの他者・テキストの筆者や過去の自分などの目に見えない存在としての他者との出会いがある。

しかし、国語科が他の日常の出会いと異なるのは、それら他者との出会いが「言葉」とおしての出会いであるということであろう。さらに本学園の国語科が目指すものとして、「その出会いから他者とかかわり合い、他者とつながる言葉をつくり出していく」という構想がある。この構想のもとに1年間行ってきた研究を振り返ると、各学年とも「他者の言葉と出会い、言葉をとおしてかかわり合う」ということは積極的に行われてきたのではないだろうか。

実践例として挙げられている小4の場合は、教科書教材をもとに、留学生との出会いを設定し、日本だけでなく外国の他者とかかわりを持っている。

また小6の場合は、新聞記事の言葉をとおして他者(新聞記者や他の学習者)との出会いがあり、お互いの書いた新聞記事を評価しあうことによって他者とかかわり合っている。

中1の場合は、作品づくりとその作品の交流によって他者とかかわることができている。さらにどの学年とも、学習したことを自分なりの表現として発信する場を設定しており、中1においてはそのことにより、学習者どうしの言葉による新たな関係を築いたり、教室外の新たな他者との出会いをつくったりするきっかけとなっているのではないかとと思われる。

### (2) 他者とつながる言葉の意識化

子どもたちの日常の「言葉」を覗いてみると、「言葉」によって他者とつながるという意識はあまりなく、自分の感情のままに言葉を使っているという現状があるのではないだろうか。だからこそ国語科の中で「言

葉」を意識させ、「言葉によって他者とつながる」ということを実感させていく必要がある。

小4の実践では、他者を他者として意識させる手段としての工夫がある。これくらいの年齢はまだ、自分の受け止めたことが印象的でないと意識に残りにくいという年齢であることから、言葉の意識化をいかに印象的に行っていくかということが大切になってくる。

小6の実践では、他の学習者の新聞記事を評価することによって、評価した者にも評価された者にも学びが発生する。その学びによって自分の書いたものの良さを改めて実感したり、他の学習者の書き方を取り入れたりすることにより、自分の言葉が一層豊かになる。

中1の実践では、自分の素直な思いを言葉にして他者に伝えることで、今まで自分では見えなかった自分が見えてきたり、他者の新たな面に気づいたりすることができ、人間関係の潤滑油となっていく。

このように「言葉によって他者とつながる」ことはどの学年もできているが、それが普段の言葉への意識化にまで深まっているかといわれるとまだまだ疑問が残る。

今後さらに必要になってくるのは、言葉をとおして他者とかかわり合い、他者とつながることによって、自分の内面がどのように変化していったかを子どもたちに実感させることではないだろうか。そうすれば日常生活の中でも安易に言葉を使うのではなく、「言葉は他者とつながるものである」という意識が働き、言葉を大切に扱おうとする子どもたちが育ってくるのではないかと考える。

そのためにも、自分の考えが他者との交流を経てどのように深まったかなどを記録させ、学習のあしあとを確かめさせるようにするなどの学習方法の工夫をし、自分の言葉が他者とかかわりの中で作り出されていることを意識化させ、他者とともに学習することのよさを実感させていくことが必要である。

「言葉」は人の一生の中で切り離せないものである。そういう意味でも「言葉をとおしてかかわり合い、他者とつながる言葉をつくり出す」ということは大切なことであり、言葉の教科である国語科がその責任を果たしていく役割は大きい。

## 7. おわりに

「他者」とどのようにかかわるか、ということがこのたびの研究における重要な課題であった。小学校においても、中学校においても、国語教育の実践を通してこの課題に取り組む一歩を記すことができたと言ってよい。このたびの研究において想定した、子どもに

としての「他者」のなかには、異文化があり、メディアがあり、自らの書く文章の読み手があった。

考えてみれば、そのいずれの場合であっても、何らかのコミュニケーションが営まれていたと言ってよい。児童・生徒が他の人々とつながるための手段がさまざまに探られていた。そして、いずれの実践においても、そのことが「言葉」を介して営まれていた。前項にも書いたように、他者とつながる「言葉」とはどのようなものかということについての意識化・自覚化をはかっていくことは、コミュニケーション能力を育むうえでも重要なことである。

もちろん、「他者」との出会いであるから、学習者にとってはけっして愉快なことばかりではなかったはずである。驚きや怖れ（畏れ）や不快感が、何らかのかたちでもなっていたはずである。しかし、それこそが大切なことである。「他者」とは元来、理解不能の存在のことを言う。異文化は、その全容を容易に知ることができない、という意味で私たちにとって「他

者」なのである。このたびの実践においても、異文化を扱ったが、児童たちの知ることのできた「異文化」は異文化のすべてではないのである。むしろ、その異文化を探究する道は始まったばかりである。

このことはメディアについての探究にも言えることであるし、「人を生かす言葉」の探究にもあてはまる。いずれも、全容を知ろうとするには広大な「他者」だ。児童・生徒がこの単元でどのように動き、何を発見したかということは、それぞれの実践報告に記した通りである。だが、それらの発見を単元内のものにとどめては意味がないだろう。むしろ、この単元は、「他者」とかかわるための心と身体の振る舞い方を身につけ、これから生きるなかで「他者」とかかわっていくためのプラットフォーム（基盤）とみなした方がよい。「他者」を受容することは「自己」を変容させることになるという、そのことに少しでも気づくことができたら、この実践に参加した学習者は自らの将来にとって多くを得たことになるのではないだろうか。